# 義經記

## 一巻

おさあい　一　幼
せんぞく　一　山賊
けいやく　二　契約
堅牢地神　二
しやうかい禪師　二
そし　二　庶子
あまもよひもすく　三　五更の天にもなれども、、、、

たいどうし　大和守泡那。泡寺うたつとどちらトヨミ泡レルカ

特別
イ 4
3159
A 50
14
3159
A50

多門の御寶　三　多聞歟

すり法師　四

四條の御堂　四

しきたいとゝふ腹巻　五　巻五、六にしきたゝと申す腹巻なり

樽にこそゝれ　五

大炊介　六

きんたの関　六　菊多の関

なん関　六

おかの大夫　六

りやゝぞゝ　六　境の冠者　〃〃



大野の國いもゝ　六

あつかしゝゑの中山　六　信濃国伊那の里駿河三河の〃〃〃

はたはやしゝろ　六　信濃国伊那の里駿河三河の〃〃〃所を陣を取つて

くもゐた　六　源太

白き山　六　金津の城そも高さ物して〃〃にかゝり

三つゝの小将　六　〃〃〃に十一代の末裔海の後胤

すゞこ　七　信濃すゞこさゝ内（守護歟）

けゝゝんの霧　七　香薫歟

よゝゝでゝ　七　漢竹〃〃〃

二巻

大野の国庄たかの　三
ほゝじ　四　芳志次
まや　五　廐次
志賀の都のふくろ心　五
伊勢のかんらひ義連　五　巫、神主
すびきし肩　五
なれぬ程は何れをそれ馴れての後はそなるぞ悔
しき　五
あくしのたかまろ　七
あかぐしらの四郎将軍　七



せいたんむしや　七　性短武者
大くわしおく　七　華飾
いんぢ　七　印地
きやうーやく　七
こめんやゝなめしにて　七
血をあえさう　七

巻三

本宮せゝしやゝ殿　一
したん　一　指彈（方用半久毛不自然ト解セリ）
こくさゝの御堂　四　虚空蔵

信濃坊かいそん　四
かゝをこえ　四
はなち合せ　四
ついさつて　四　弁慶ついさつて申しけるは
きやゝゝごゝが過さて　四
ゑいやつき　六
すゑかは　七
安房と上総の境なるつくしうみの渡　七
佐貫よえだ演　七
いかいしり　七



いほう
いなん　七　いつれも上総の国の住人
うさ
あしかくはのかみの勢
らんのわゝり　七
行方の原しゝち　八
とゝろかけ　八
さけはしの宿　八
こかは口　八
巻四

むなうの城 一
かうがん そぐにも遂げられざる 二
よすま所 四 隠岐板おまぬ中屋うて
おさあとの、かう 四
細貝を目安にし 四
はぶくらせあて、と射通す 四
矢さ、はげて 四
左右のかうすがしら 四
なのめ 四 馬のさんぶさるのめの隠る
そんじやうその国 五

せみまと 五 帽をなろまんとすれと
やほの柱 五 帝の国ねてまるすとつかりてさそうらす
みつしげめひの直垂 六
たからすびぶの矢 六
時のつくりと目のかさきは真中をふつといちぎり
たるこそ面白 二
ぢがい 六
つのぞわりを五六寸 六
みたらひる 六

巻五

近江の国ゝ矢りける 猿楽 二

伊勢の國より奉りける白拍子

雲鬢花顔のかゝるはつぶさい

勝手ひめくりしき王子

さゝけやこさゝはの明神

ちりき

黒漆の太刀かゝめぐりにぞ佩き

鮫の皮のつなぬき

しこの矢筈さがりに負ひ

川瀬の波よりめゝちゆん

ないこゝちせゝの弟子



ゝふがぜんぢ

つぶら井とりふ太刀

忠行の太刀

にし大中黒

ちりぬるの鏑

はちばゝの羽

川ゝらゝ川つら法師

又眼

じんせい作りの太刀

いはゝ彼所

さかつゝ兎びら

こゝかいをゝ段よ三てゝ対そづさず

いはゝ神仏ゝいはゝ神仏　五
やくいのかみ　五
北はほくさゝ　佐倉の家　五
東のとびのを　五
くゝしやゝのゝやゝ　六
しの笠　六
ゆがりはの峠　六
ゝしゝがゝ　六
ゝんすのざゝう　六　千葉の家
けんごのけふじ　六



孔子のさはり　六
歌をぬこしきよちゝく　六
ちやゝはゝばゝ　六
こかい　六　巨海
ひたかのぐんじ　六

巻六

かや　一　忠信の妾
ばゝいつ　二　放逸
すびき打ち　二　矢かき屋ひろみ
まゝふさ　二　あ乃や、ここに訛て砧と作ると言ひ伝へし



森房
森房

南都ちんじゅ坊 四
長刀こぞりはの間 四
とくこ 四
ちゝよゝ 四
五十二類 五
小野のすりはり 五
しゝやゝのかんしん 五
いきよゝ 五
九郎判官ときやゝはい 五 向背
あずん 五 讒言 と解す



とくこが心をきやゝしやくし 五
くがと法きしる子 六
しんむしやゝの曲 七 白拍子の異名
みこゝの歌 七 富士山伝説
たゝのづし 七
すきものゝせゝしや 七
四條のきずはら 七
なんぼゝを次てつづり 七

巻七

ちんぼゝ阿漏陀経 一

葛太口村名産かりすくる柿の衣 一
かちんの脛巾にぐんぐはいて 一
ちんーやーには四尺五寸のたたり 一
必金・あかつき 一
一本さし
ちーちやーの藤は杉と殺れ 一
ぢたいわおとこ 二
さやなみ
小霞輪 二
あらーい山 二
のーみ山 二



すかーの宮 四
かなづのこは野 二
根上りの杉 二 汐越の杉 次
かかの国宮のこう 二
大のー浜り 二
あながさりの橋 二
たけの栗殻山 二
くろさかロ 二
こいしやーにかーり 二
六どーじの渡り 二

なごの林に

いはせの渡りに

四十八か瀬に　黒部

蒲原ながいしかと申す雛形に

ひ〜み山に　再び

よなが山に　米原

廿三里の かり手演に

かづきしらさきを漕ぎに

ふりみやいしに

九十九里の演に

いちふり

青海

せなみ

いはふね

八十里の演に

あらかはに

すとうとみちに

ゆきしろみつに

いはひがさきに

おちむつやながさかに

大泉の荘に

大ほうんじに

すぎのをか

あいかはの津

名珠のせき

清河

最与の郡まかりていなの渓に
かなくりの地蔵堂に
かめわり山に
玉造むろの里に
あねばの松に
打ちふてくに
かゝけをつけきらはず に
通せんくはゞに
送りこゝ迎ひこゝに
せいたい菩薩に



木邊とり山に 東下きみち
白きなへ色の衣を
わんいち・わゝわを
急さゝせんしたてを
すゝこの子を
かな津のそは郡を 東下そゝる
ほろさを
あいのいけを
によたいこゝの宮を
みやゝの六郎光あきら を

たけのはし 七
はせとえが谷 七
まつなかの八幡 五
如意の渡り 六
やくと 六
うたのわき 六
なかはし 六
いはものさき 六
かちめとりふもの 六
浦の代官はらゝ権の守 七



こむせゝが原つて 七
むつゝかんゝうんそわかゝ 七
みゝもんの嶽 七
かゝゝ山 七
あをしま 七 栗島歌
きほろゝかたかゝ 七 佳恨
杉陰が浦 七
すゝがみさき 七 能登
みゝゝまち 七 鹿ば
くがみ 七

あらかいの杉原

左やなぎ

右うつぼ

ちんがかみは

はらかい

かさどり山

三世の薬師堂

ぎやへい

こしんは天

つけのたかうら



あけなみ山

おかは

五所の王子

無野は川はた河・羽黒又は清河

ちうさのせう・しやうのさうしま

鎧の明神・宵の明神

たかやりの

みるたかう

竹くつべの杉

やもりの大明神

あい河 七
へぢらの里 七
亀割山 七 再
すもり 八
せひのうち 八 衛門の尉 欽
ものの郡 九 桃生の郡 欽
勝浦 さ はすまの庄 九
いつの冠者 九
たゝくがいはや 九 達谷が窟 欽
巻八



ひつあの五郎 三
とものとの冠者 三
せゝの御料 三
ひゝの死罪 三 非科 欽
いまあこのさゝら 赤糸縅 四
てゝの太郎 三
やまゝと申す鈴色 六

# 曽我物語

## 巻一


継體あいぶんの器量 二
わが山の住侶と慧亮和尚 二
なづき（腦） 二
りゝあんけんがゝゝ寂たり 二
諸國の竹府に名をかけ 二
叡慮を背くせいらゝは 二
うんてゝの故 二

せいしをひそめて　二
かげごゝろある中の身　四
ちゝちやくどもいひけれ　五
青幡し水鉢をげかさす、邪論もくの聖をまどはず　五
げんばうの上裁　五　憲法頌
てんじゆが古　五
こゝゝゝさゝなき不義の富　五
月の梅をねさゞと為をかけて財ふるば　十
弓矢の征敷をかさるゝは　十
内はおのゝいかりてゐい梨地の蒔きていそなりにめをさましたり　十



りうせさがつかり出でてはけんらゝが茫然とせゝに　十
みぎは優りの相手　十一
はなゞゝにおしゝ拓ゝゝゝ　十一
朱紅の日を出ゝゝる函　十一
若き芳のおいすげゝゝるに仏　十一
河伯が濱はさゝゝ　十一
菩薩ちり　十一
ねぎりの角力　十一
射翳　十三
せいちよは夫のたやすきへうくにとあんはくえいは大に拔れ胡の情をりうれ　十六

菊美

巻二

へうじ　一　表事（兆）

舊主が徳ゆ〜古風のかほでせきそになりとも　四

わ〜さ〜とうけんぶん三位そうそうやゆ〜ちう〜おぶんが其の

門又詳かたせんまはかうじ　四

あらくがふを失ひる

ちゆ〜さいあうが害より遠ひしも　七

いゆ〜のはう　七

一ぢん唐は黄金のたいへんざをぶぐき　十三



みき（酒）十七

せきそとふ戦ーき民　十九

けんほう　十七　書名

国の文王いうをけうとせに　十八

せいおうの初よ　廿二

雲の衣はちとうの衣をやく　廿二

奉幣にわ〜のせきしもなり　廿三

百日ごん護の誓　廿三

仏像経巻をきや〜そうす　廿三

七万私、おどろを保ゆるく　廿三

巻三

一ばゝ中ゝてゝんゝ ハ
誠ゝてゝだゝの孫を見ぬれいぶぎのおくひまて候へども ハ
彼等は世上のせいたゝ なり
せゝゝゝじゆんぎ ル
もの者の身まては候はずれ
ちやゝし 十 人名
国をとすてんげん 十
めゝこんの君はけゝへいゝゝの思をゝ じゆんの長
は慶親の悪を懷く 十一



巻四

ほゝくゝしゝの命ゝ手紙の限りを保つゝり 三
ゝゝ前の禁人を鶴妻を撃つてぶゝかゝの鐘を撞つ 三
れいけんじよさいの儀をおゝりまゝゝす 三
しんかんのおゝるをけんてゝにして 三
きゝじよは千家ゝまゝず親を千勘ゝ年ゝん ロ
ゝゝゝきゝゝゝじけゝじ ゝ
かやゝの書きはゝじゝを除てゝり ゝ
世ゝのふゝゝにて学ゝの名 宗 典をゝ ゝ
三浦を打ち出でつぶゝの端 十二

沛ちんばつの上は　十三
五の志の深きをはふつくんそまをんん　十三

巻六

ひとまども義ごさるものか　八

巻六
これやせうろん國の將ゑそきするるい好たるあり
巻七
心すあふはを呉越そらん　九
くわげんは地を抜き　十
をんつは耳を抜き　十一
ちそくは鼻をきる　十二
せんめんを抜き　十三



くわそくはを施　十四
くやうめいは手を焼めをきをすす
高砂もーんやくをぐぐざる痛をは法せず　十五
げんーやーを玉し善言をやうをする事をは用いず　十六
ん廊の座うち掃ひ　十七

巻八

りーわーゆ作りの薙刀　三
てらか　四名
ぬりなーを形び墨さ　五
於手姫むらんりうに義ちかーり　六

かつきらのもと宮角さえりたて　六
みのまま本間の人こは秩父方へぞいきせ給る　七
銭を強るもいと多く強ぶる物ぞ　八
養由が術きよりくりうが弟子にさかく十六つきしぶが　九
たかすべらの鏑矢　十一
ひやう紋の竹笠　十二
かうざいみう様を二つ三つ附け　十三
たいさんの亀は巌を背ち　十二
たんさくの絵の絹の縅い井桁をきる　十三
せんひの然うしもる所　十二



巻九

わん議　十二　又あざん
めくらい　十四　員外
をうしの矢　十四
さんだんせずしてふみぬ　十七
しもうてぬ頃人顔　十四
只今は日の敵あをに衣を重ねて迎すべき北ぶ
たんふちはさるまりて後へども　十七
祝の進める盃ぶきうが若ともていつべし　六
夜半のひやうじは何の用ぞ宮やや　七
かいふしては逃げずして　十一

其のはぶに　十二
けう鸞　十三
かいふして　十三　ニ十四　かいふいて逃げにける
べつの次第　十三
市改所山つらはんぐゝに給り　十三
白貢市ものひやうじの少さき　十三

巻十

市けいしやく一
とんこうの魚は飢を思はさるを約くとはよゝらんの
言葉なるべし一



こゝやさん一一言思慮あるべきなるや一
五郎をばはあすわにつれて　七
はいさやゝちくていの思をなり　七

巻十一

秋も所たちもみぢ紅葉をみ　一のやゝ妹の高ずるを、
貧女何をむりのあるべんしお衣をおちてゆゝん
あぢかつさる所にせんさ尼　一人一
所作ださい　12
こゝ一一を約ふに
天をとりふゝしゝのみに

しに若をすし
正ゑ尓ごんかく慶深く
しずらんの句
ゆえに前つるちりのゝかかちよれいとゝ言ひつゞし
せしめいるゝ
巻十二
修りゞゆしかるし
現世せしにし
直指だらしずのもくぞくゝり
毒地ゑふせんが大ぢ



法華の行 法師か
大りそくぜんしずゝ功德
一さんいのに
過去よりそんしよ世この罪
ごうれん 悟りの焔
五ちゝの闇
しさゝをんるの智

保元物語

巻二

かゝかは破の猪武者

物そのものゝあはれなる

矢たゝなに手取すてゝ

般若野の五三昧

石の中の蛛

巻三

ほかな（行篇）

平治物語

巻一

あさたんところ（朝所）

失ふべかなる

一本御書所

つきげ（桃花毛）

巻二

かくなつかの駒

鞍ゑ手形をはくる

源もの習はさはさぐす

一日猿楽はなをかく
住むべかなる

巻三

碁の撰過きぬ小ばさらと思ひ忘れけり
坊主

うるさし
なるるあす逆の作せ
たゝかのをさいて年を暮かせ